

宮下遼『物語イスタンブールの歴史』を読んで

森本 惇紀

この本はトルコ人のノーベル賞作家オルハン・パムクの翻訳者として知られ、作家でもある宮下遼さんがイスタンブールの歴史を紹介している。本の構成は地図とともにイスタンブールをいくつかの地区にわけて、地図や絵画、写真を混じえて全八章にわたり広げられている。

イスタンブールは現在の名前であり、ギリシャ植民都市「ビュザンティオン」、ビザンツ帝国下一千年と共に帝都としての「コンスタンティノポリス」。イスタンブールはオスマン帝国とともに歴史を歩んできた。そのためどの地区でも、それぞれの国とのストーリーがある。筆者の作家としての才能がとても高く、それぞれのエピソードをわかりやすく、簡単に読みすすめることができた。

中でも特に興味深かったのは、トルコ人の一人あたりの紅茶の消費量は世界で二位というエピソードだ。トルココーヒーで有名なことは知っていたが、現在の国民飲料はチャイだということは知らなかった。しかし元々はコーヒーの方が主流だったが、オスマン帝国がイエメンをイギリスとの戦争で失い、コーヒーの生産が不可能になり、栽培可能な茶を生産し始めた。そして黒海を通じてロシアからチャイという文化が流入し、今では国民飲料になったというエピソードだ。イスタンブールの歴史からは少しそれるが、古代から様々な文化と歴史の混ざり合うトルコらしいエピソードだと思う。

残念な点をあげるとしたら、「物語」とタイトルに付いているように、ストーリー性が強く、また各章ごとにその地区の歴史を遡っているので、史実を忠実に、淡々と読みたい人にとってはつまらないと感じるかもしれない点だ。

それでも私にとってはとても面白く、イスタンブールの街を散策しているかのように、歴史的な街を知ることができた。

日本から最も遠いアジアで、最も近いヨーロッパをよりリアルに過去から現在まで知ることができて楽しかった。

参考文献

宮下遼 二〇二一年九月二十五日発行

『物語イスタンブールの歴史』 中公新書